

話し合い場面における相互行為としての「不同意」の分析

—各聞き手が初めて意見を述べる位置を中心—

馮 佳誉 (関西学院大学大学院生)

1. はじめに

日本語は「曖昧で自分の考えをはっきり言わない」と思われているが、話し合いのように自分の反対意見を言わざるを得ない場面において、どのように「不同意」が行われているのか。これまでの研究では、ポライトネスの観点から言語形式やストラテジーに関する語用論的な分析が多く行われているが、話し合い場面において、何が不同意であるかという判断は、各研究者のアドホックな定義に委ねられている。リアルタイムの会話の展開において、会話参加者の視点から見て、ある発話がなぜ「不同意行為」として認識可能なのかという根本的な疑問について言及されたものは少ない。

そこで、本研究では、会話分析の手法を使い、話し合い場面における不同意行為の解明に向けた最初のステップとして、「提案に対して、各聞き手が初めて意見を述べる」という位置に限定して分析を行う。この位置で不同意行為として認識可能な発話にはどのような特徴があるか、また、その不同意行為に対して、「提案者—聞き手」の相互行為がどのように展開していくかを明らかにすることを目的とする。

本研究で用いるデータは、「交換留学生に対して4回分の日本語授業を行うための授業デザインを決める」ために、7人の参加者が話し合っている場面の録画データである(計約540分)。この場面での話し合いは、「提案→提案に対する議論」というパターンで進行していた。その中で、研究対象とする発話は、各提案に対して、各聞き手が初めて意見を述べる位置でなされる、提案そのものに関する新しい意見である。

2. 「各聞き手が初めて意見を述べる位置」とは

事例分析を通して、こうした位置は、聞き手が単に初めて意見を述べているだけではなく、意見が述べることが期待されており、参加者もそのことに志向していることがわかったため、本研究は「各聞き手が初めて意見を述べる位置」と名付けている。そのことを、実際の事例を見ながら説明する。

断片1はUが自分の提案を述べ終わった後の場面である。Uは「インタビューの表現を教えるために、授業中、学生にテレビ局のスタッフを演じさせ、お互いにインタビューをする」という提案をした。09行目Uの発話に注目してほしい。

【断片1】「ニュース」の提案 1:34-1:48

(Kはその日の話し合いの進行役である)

01 U で、撮影したデータを、学生にプレゼントして、(0.3)まあ、み
02 んなで共有して楽しんでもらえればいいんじゃないかな (0.2)<
03 とします:>
04 (0.6)
05 U 以上です。(視線-K+nod)
06 (3.3)
07 ? ° emmmmmmm°
08 (0.6)
09 →J emmmmmmm;>としか言わない.<hhh.> (笑い声)

断片の01, 02, 03行目は、Uが述べた提案の最後の部分である。03行目で、Uは「と思います」と言い、提案を言い終えたことを示している。0.6秒の沈黙が生じた後、Uは「以上です。」と付け加えた後、視線は進行役のKに向けられ、「これ以上言わないので、進行してください」ということを示して自分の順番を終わらせる(05行目)。その後の位置は、各聞き手にとって提案に対して意見を表明することが可能な位置と考えられるが、誰もターンを取らなかったため、3.3秒の沈黙が生じた。その後、07行目、聞き手は「emmmmmmm」と言ったが、明確な意見が産出されなかったため、09行目でUは再びターンを取り、

「emmmmmmm としか言わない」と07行目の反応が不十分であることを示し、提案に関する意見の産出を促している。こうしたUの振舞いから、提案に対する聞き手の意見が期待されていることが分かる。

3. 相互行為としての「不同意」の分析

上記のような位置において、提案に対して不同意行為が行われる場合、提案者と聞き手が明確な不同意を行う

ことを共同で避けていることがわかった。その際に、聞き手の発話の組み立て方には二つがあることが明らかになった。一つは「質問による不同意行為」であり、もう一つは「条件表現による不同意行為」である。それぞれの特徴とそれに対する提案者の反応の特徴について以下の二つの事例で説明する。

3.1 質問による不同意行為

【断片2】「ニュース」の提案 1:34-2:30

01 U	で、撮影したデータ↑を:学生にプレゼントし↑て、(0.3)まあ、み	21→H	えっ、 <u>スタッフ</u> は:なんか、インタビュー:;
02	んなで共有して楽しんでもらえればいいんじゃないか↑な (0.2) <	22	(1.2)
03	と思います:>	23 U	うん::[す-
04	(0.6)	24→H	[<u>だけ</u> (.)ですか?
05 U	以上です。(視線→K+nod)	25	(0.9)
06	(3.3)	26 U	スタッフ:はですね、いや、いろいろカメラマンとかも考えたんです
07 ?	° emmmmm°	27	けど.>カメラマンがずっと撮ってるだけ、<[話さないなあ:とお[もつ
08	(0.6)	28 H	[そうですね。 [はい.
09 U	emmmmm; >としか言わない.<hhh. ((笑い声))	29 U	たの <u>で</u> :(0.8)そこ外したんですね.=わざと、(0.3)そこを
10	(2.4)	30	[外したん:はですね.
11 Y	なんか、ニュー-, ニュースって? ((手元のプリントを捲っている))	31 H	[emm::
12	(0.7)	32 U	>だから n-<(0.2)とにかくが-<:せい:: <u>が</u> (0.4)とにかく:(.)話
13 H	これ[サブ(0.2)3,	33	す.
14 U	[あ::,	34	(0.4)
15 Y	[°>あ、そういうことか.<°	35 H	うん::
16	(0.2)	36	(0.5)
17 U	あ、ふん、4のほうですね。[まず、まあ、ちょうど今、(0.3)>ホチキ	37 U	役割にもっていきたいので、ここはもう少し:(0.2)考える必要が
18 ?	[emmmmm.	38	[°あるかなあとします。°
19 U	スで<とめちやったので、	39 H	[うんうんうん.
20	(1.0)	40 C	[うんうんうん.

断片2は断片1の続きである。21, 24行目Hの発話に注目してほしい。Hの発話順番は「えっ」から開始され、何かに今気づいたことを表している。そうすることによって、Hは今までの会話の何かが自分の想定と食い違っていたことを示している(Hayashi 2009)。それに続き、「スタッフは」とUの提案の中で出た言葉を取り上げ、強く言うことで、これからスタッフのことについて何かを言おうとしていることを予示する。また、話している際に、「は:」のような語尾の引き延ばしや、「なんか」の使用など言いよどみ表現が続くことで、発話の産出が遅延されている。21行目の最後の「インタビュー:;」は、語尾がやや伸びて音調が少し上がることで、発話が一旦区切られ、相手の反応を引き出そうとしているが、この時点で、何の質問なのかはまだ不明であり、それについて詳しく説明する行為が続くことが強く投射されているため、22行目の相手が反応できる位置で、Uは反応していない。だが、ここで、Hはすぐに詳しい説明を言い加えなかったため、1.2秒の間が生じている。その後、23行目で、「うん::」と21行目Hが一旦区切られている発話に遅れて反応し、その後「す-」と何か言い始めるが、24行目Hの発話とオーバーラップをしたことで、Uの発話が中断されている。

24行目の発話でHは、21行目の発話に、「だけ(.)ですか?」と統語的につながる表現を付け加えることで、「スタッフはインタビュアーしか考えていないのか」という、役割の構成について確認要求を行っている。また、「だけ」と強く言うことで、言おうとしていることが単なる確認要求ではなく、「それだけでは何か足りない」という提案への指摘としても理解可能である。

上述の分析から、聞き手Hは「自分が言おうとしている内容は提案の問題点である」ということを明示せずに、提案者自身にそれを予測させるような仕方でも、確認要求の発話を組み立て、明確な「不同意行為」を行うことを避けていることがわかったが、受け手である提案者がそれを不同意として理解しなければ、その不同意行為は実現されない可能性がある。そのため、26-38行目の提案者Uの発話に注目してほしい。

Hの「スタッフはなんかインタビューだけですか?」という確認要求に対して、26行目から、Uは「はい・いいえ」で答えず、提案の説明を始める。26行目、Uの発話は「スタッフ:はですね、」と21行目Hの発話と同じ「スタッフ」という言葉から開始され、問題点の対象がスタッフであることへの理解を示した。その後産出された「いや」は、Hの質問が体現する前提について何らかの抵抗を示している(串田・林2015)。つまり、UはHの「スタッフ」に関する想定が誤っていることを示し、これからその誤りについて説明を行おうとしていることが見てとれる。

説明する際に、Uは「いろいろカメラマンとかも考えたんですけど」とHの「他の役割を考えていないのか」という前提を否定し、自分が最初から「スタッフはインタビュアーだけである」ことを想定したのではなく、

色々と検討した上で、今の提案に至ったことを表明している。

それに続き、Uは理由を表す従属節「ので」を用いて、「スタッフはインタビュアーだけである」という提案内容を支える理由を提示している(27, 29行目)。その後、「わざと」を付け加えたことで、Hが指摘しようとしている問題点は検討した上での決断であることが示されている。その後、0.3秒の間が生じ、「そこを外したんですよ。」と先述の理由から辿り着いた結果を繰り返す。この後切れ目なく32行目の発話を産出している。

32行目の発話は「だから」で開始され、今まで述べた内容をまとめようとしている。それに続き、Uは「とにかく、学生がとにかく話す役割を持っていきたいので」と言い、提案が「学生が話す」ために作られているものであることを示し、提案の正当性について弁明している。最後に、「ここはもう少し考える必要があるかなと思います。」と言い、Hが指摘した問題点を受け入れ、「今後の課題」として考えることを表明し、その問題点についてさらなる不同意の産出の可能性をブロックし、その後に明確な不同意が来ることを避けていることができる。

3.2 条件表現による不同意行為

【断片3】「オノマトペ」の提案 1:53-2:47

01 H あ「日本のアニメ：漫画のせ-界へ」という：(0.3)サブコン te-	69 H [そう.(.)オノマトペ：一つ：だけもう60ぶん：
02 セプトの内容として、	70 C そう。
03 (1.6)	71 H の授業を作 ru-[れる。
04 H [°今考えています°	72 U [°それだと°<
05 U [うん：：	73 U そう.>そうそう<それだけで終わって=
06 Y [うん：：	74 U =[しまう可能性：：[が↑：：あるので：
07 U °なるほど°	75 H [そう。
08 H °はい°	76 C [そうですね° [うん：：好きな作品について話す：：↑° =
09 U >°オノマトペといのは°<私は面白いなあ>°>°と思う°<この四	77 H =>°とりあえず°<今回はその、(0.6)>まあ<出来るだけ多くの
10 人はオノマトペの[研究()です↑ね。=	78 ことを考えて：、
11 H [¥>そうですね.<¥	79 U うん：：
12 H =°うん：°	80 H °>入れました.<°
(50行省略)	81 ? うん。
63 U =オノマトペに関する、(1.2)まあ：	82 (0.6)
64 u ((視線は手元のプリントに向けられている))	83 U >オノマトペそれだけで二時間でも¥三時間でも
65→C 60ぶん：：の授業で：(1.2)°>なんか<°紹介↑：：(0.8)なん	84 [(やれそうな/取れそうな)気がするから=
66→か、好きな作品について話す：オノマトペ、	85 H [そうですね
67 (0.7)	86 U =[.h まあ：：¥
68→C [の楽しみ方、	87 H [うん：

断片3はHが自分の提案を述べ終わった後の場面である。Hは「日本のアニメと漫画の世界へ」という授業サブコンセプトを考え、学生に好きな作品について話してもらった上で、作品によく出てくるオノマトペを教えるという提案をした。注目したいのは65, 66, 68行目のCの発話である。この発話が産出される前に、提案に対して意見を述べているのはUだけである。ここで、Cは順番を取り、Hの提案に対して初めて意見を述べ始めた(65行目)。

Cの発話の組み立て方を見てみよう。冒頭で「60ぶん：：」という授業の時間について言及することによって、これから、時間の長さに関連する何かを話そうとしていることが示されている。後の発話が産出される際に、Cは「XするとY」という構造の条件表現を使い、Hの提案の中で内容を引用しつつ自分の意見を述べようとしている。その際、「なんか」を二回繰り返したり、「紹介」を「好きな作品について話す」に言い変えて、Hの配布したレジюме¹に書かれた二つの項目について話していることをより明示することで、Cは自分の意見を慎重に産出している。

ではなぜ、その組み立て方が「不同意行為と関連づけている」と言えるのかを、09行目でUが同意を表している発話と比較しながら考えてみたい。Hの提案に対して、09行目でUは「私は面白いなあ：」という肯定的な評価を先に明確に示している。その際に、肯定的な評価だけを産出するのではなく、なぜこのような評価を行ったのかも「この四人はオノマトペの研究です↑ね」と述べて明示している。

一方、65, 66, 68行目Cの発話では、評価を示さず、冒頭で「60分」という、会話参加者全員にとって既知のことを取り上げて述べている。その後、Cは提案の内容を言及し始めた。そうすることで、これからの発話は、時間に関わることであり、それは「授業で取り扱おうとしている内容と時間が合わない」という提案に否定的な意

¹ Hの提案のレジюмеは次のようにまとめる。

サブコンセプト：日本のアニメ・漫画の世界へ	
内容：①好きな作品について話す	②オノマトペの楽しみ方
好きな作品を紹介する	オノマトペクイズ
自分の国の作品との比較	オノマトペを教える

味を含んでいることが予測できるだろう。

次に、「XするとY」の「Y」の部分を出した際の、CとHの間の相互行為に注目する²。66, 68行目で、Cは「オノマトペの楽しみ方、」と言い、自分の発話を完成させようとしているが、69行目Hの「そう。」と重なり、発話は中断された。この「そう」という発話で、Hは、Cが言いかけたことを自分はもうわかっていたことを表明している。続いて、Hは66行目のCの発話の中の「オノマトペ」を取り出し、「オノマトペ:一つ:::だけもう60ぶん:」と述べ、自ら提案の問題点を明示し、Cの発話を先取りして完成させている。それを聞いたCは「そう。」と強く言うことによって、Hが述べた提案に関する問題点に同意を示している(70行目)。ここまでのやりとりから、HはCの発話が提案に対しての不同意であることが分かっただけではなく、不同意の内容も理解できたことで先取りして表明している。その後、Cは「うん::好きな作品について話す::」と語尾をやや伸ばし、内容についてまた何か言おうとしているが、Hはそのまま発話を続け(77行目)、それにより、Cの発話が中断されている。

77行目Hの発話は「とりあえず」で始められている。『大辞林』(2006)の説明によると、「とりあえず」の意味は「十分な対処は後回しにして暫定的に対応する」ことである。ここでHは「とりあえず」を使うことで、中断されたCの発話が自分の提案内容に関わっていることへの理解を示しつつも、提案に関する議論を終わらせようとしている。それに続き、Hは「今回は」と述べることで、自分の提案が暫定的なものであることを表している。またその後、「できるだけ多くのことを考えて入れました」と理由を付け加え、Cが述べようとしていた問題点も、できるだけ多くのアイデアを考えるために入れたものであることを述べて、このような提案をしたことの正当性を主張し、提案について弁明をしている。以上をまとめると、HはCが指摘した問題点を受け入れつつも、「提案が今回だけの暫定的なものである」ことを表明し、Cの不同意の進行をブロックしている。

4. 考察

本研究の分析から、各聞き手が初めて意見を述べる位置において、不同意行為のやり方には上述の二つのパターンがあることが明らかになった。二つのパターンは、どちらも長い提案のどの部分に異見を持つのかを他の参加者に明確にするためになされている仕方であると考えられるが、使われている文脈に違いがあった。「質問による不同意行為」の仕方は、提案の中で直接含まれていないことを問題の対象とし、かつ意見の宛てが提案者のみである場合に使われており、「条件表現による不同意行為」の仕方は、提案の中に既に出た内容を問題対象とし、その内容が何かよくない帰結に辿り着く可能性があることを示す場合で用いられている。

5. おわりに

今回「話し合い場面における不同意行為」に関して、「各聞き手が初めて意見を述べる位置」に焦点を当て、事例を挙げながら分析を行ってきた。結論としては、その位置での不同意行為のパターンは「質問による不同意行為」と「条件表現による不同意行為」の二つがあることが判明した。また、そのような不同意行為に対して、受け手である提案者は提案について弁明を行い、不同意行為の進行をブロックすることも明らかになった。今回の分析を通して、話し合い場面において、各聞き手も、提案者も、「発話が不同意の表明である」ということを、双方に理解可能な形で発話を組み立て、対立する状況が目立たないように、双方が明確な「不同意行為」を避けながら会話を進めていくことが明らかになった。

また、今回の研究を通して、従来の研究でよく使われている「不同意行為」のストラテジーや構成要素の分類の仕方に対して、「なぜそれらのストラテジーや構成要素が不同意行為として理解可能なのか」という問いに対する答えの一端が明らかになった。今後の研究において、他の位置での「不同意行為」を分析することで、話し合い場面での「不同意行為」の全体像を明らかにしたい。それは、話し合い場面のスムーズな進め方の解明にもつながり、非常に有意義なものであると考えられる。

参考文献

- 串田秀也・林誠(2015)「WH 質問への抵抗—感動詞『いや』の相互行為上の働き」『感動詞の言語学』友定賢治編 pp.169-211 ひつじ書房
- Lerner, G.H. (1996). On the “semi-permeable” character of grammatical units in conversation: conditional entry into the turn space of another speaker. *Interaction and grammar* pp.238-pp.276 Cambridge University Press.
- Hayashi, M. (2009). Marking a ‘noticing of departure’ in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, 41 pp.2100-pp.2129
- 松村明・三省堂編修所編(2006)『大辞林』第3版 三省堂

² その際に、Uの発話も見られるが、その発話が提案に初めての意見ではなかったため、研究対象外とする。